

野の仏ギャラリー ⑮

観世音菩薩立像

南多久町妙覚寺

丸彫りの坐像で、足元には別造りの蓮華台があります。頭部に円文のある宝冠を載せ、眉間に白毫があります。ふくよかな顔立ちで、両手に蓮華を持っています。袈裟には三重になつた縦長の衣文が見られます。観世音菩薩は広く民衆を救済するため、相手に応じて変化し、六観音や三十三観音などの分身を生み出しました。

銘「講衆」三元禄九丙子天十一月吉日 人名五名」



○菩薩は本来悟りを開く前の修行中の者を称します。

○白毫は仏の眉間に生える白い毛で光明を放ちます。

○講衆は講に参加する人で、今回の例では観世音菩薩を信仰する人たちです。

○銘の元禄九丙子天は西暦一六九六年です。

多久市郷土資料館長 藤井伸幸

今月の論語

忤せずんば発せず

苦しんだあとでなければ
上達しない。

今月の帰宅放送は、東原摩舎中央校9年の石丸瀬里奈さんです

教育長コラム

ちよっとい話



「先生」

日本の文化を伝えたくて、地域の方に俳句の手ほどきをしていた。その方の名は茂吉さん、ふさわしい御名前だった。独学で句を書き溜めて新聞に投稿されていた。子どもたちは、褒めているうちに時々素晴らしい句も作つた。茂吉先生は、子どもたちの分まで、裏が白の新聞広告用紙を溜めて持参してくださり、広告用紙は立派な学習用具となった。勉強をしたくてもできなかった若い頃の仕事の合間にも、退職後の野良仕事の合間にも、常に裏紙と鉛筆は傍にあった。茂吉先生の人生を支えた句づくり。辛い時、悲しい時も、句に励まされたのかも察すると、胸も熱くなる。茂吉先生は外部講師だが、子を取り巻く大人は何らかの先生だろうと思う。子は見て育つから、範を示す大人であるだろうか、時々自分に問いかけては反省する。

教育長 田原優子

市民文芸

◆ふり向けば幾星霜の道程に
夢と希望が風に吹かるる
浦野 嘉恵

◆庭仕事吾に委ねてあれが咲き
これも開くと 夫の喜ぶ
川浪 信子

◆夢という地図は破られ進むべき
道を心に問いかけてみる
野崎 隆幸

◆人間が地球をこわす愚かさよ
コロナ禍豪雨に知らされる今
梶原恵美子

◆わが歌に合わせ間を置き鳴く小鳥
ひと声ふた声風呂の宍越し
尾形 節子

◆時鳥姿見えねど懐かしく
本村 則子

◆夕菅や髪湿りを束ねたる
おおやはな
武富 律子

◆ご浄土は有ると思ひし蓮の花
中嶋 清子

◆新品の三輪車の子風光る
富樫 明美

◆灯台へ続く細道青岬

◆忘れぬ昭和の歌詞がある演歌
大谷 和

◆微熱では済まぬ予感の恋心
三塩不二子

◆他人だと思ふ涙がすぐ乾く
田代まつこ

◆友と会う昔の話とぎれがち
古賀 弘子

◆昨夜見た夢の続きと目を閉じる
松下 修

短歌 《麦の芽短歌会 互選》

俳句 《互選》

川柳 《多久川柳会互選》